【主題】確かな学力を身に付けた生徒の育成

【副題】質の高い「学び合い」の授業づくりを通して

【学校・団体名】石巻市立河南東中学校
【役職名・氏名】校長　齋藤　和宏

1　主題設定の理由

今日の社会は変化が激しく、先行きが不透明で予測困難な「ＶＵＣＡ時代*1」と呼ばれている。今後の社会の担い手である子供たちにとって、社会の変化に伴う諸課題に対応しながら生き抜くために、意思決定力や情報処理力、課題解決力等の育成が求められている。

令和３年の中央教育審議会『令和の「日本型学校教育」の構築を目指して―すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現―(答申)』では、『これまで以上に多様性を尊重し、ＩＣＴを活用しつつカリキュラム・マネジメントを充実させ、発達の段階に応じて、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが重要である』と示された。

これらを踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくために、「学び合い」を取り入れた授業が最適であると考えた。「学び合い」を取り入れるだけではなく、「学び合い」の質が高まった授業づくりを行うことで、確かな学力を身に付けた生徒の育成を目指すことができると考え、社会の変化に伴う諸課題に対応して生き抜くことのできる人材を育成するためにこの主題を設定した。

*1 VUCA（ブーカ）時代：Volatility（変動）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字を合わせた造語。現代社会が困難かつ予測不可能な時代であることを指す。

2　生徒の実態

本校の生徒は、行事や部活動において明確な目標を持ち、達成のために努力し続ける生徒が多い。その結果、部活動の各種大会やコンクール等で数多くの入賞や入選を果たしている。一方で、休みがちな生徒、学習面や生活面で配慮を要する生徒も数多く存在する。これらの生徒を含めて、全ての生徒における個別の教育的ニーズを把握し、一人一人の可能性をよりよく伸ばして「自立した学習者」を育成することが重要であり、それぞれの学力や特性に合わせて生徒が自らの課題を選択し「学び合い」による解決を図ることは、「個別最適な学び」の充実につながると考える。また、「学び合い」は「全員が分かる・できるようになる」ことを目標に、生徒同士で教え合う学習形態であるため、「協働的な学び」の充実も図ることができる。これらのことから、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが可能になり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながるものと考える。以上のことを踏まえ、「学び合い」の質が高まる授業改善を図り、生徒の確かな学力向上につなげることで、「自立した学習者」を育成する。

令和６年度は、研究主題を「確かな学力を身に付けた生徒の育成」、副題を「『学び合い』を取り入れた授業づくりを通して」として、生徒同士の「学び合い」が活性化するための課題設定や学習形態等の在り方についての手立てを講じてきた。令和６年４月と１２月に実施した標準学力調査では、１５教科のうち８教科で校内平均と全国平均との差が縮まった。第３学年では、全ての教科で校内平均と全国平均との差が縮まっており、特に数学と社会は全国平均を上回った(図１)。

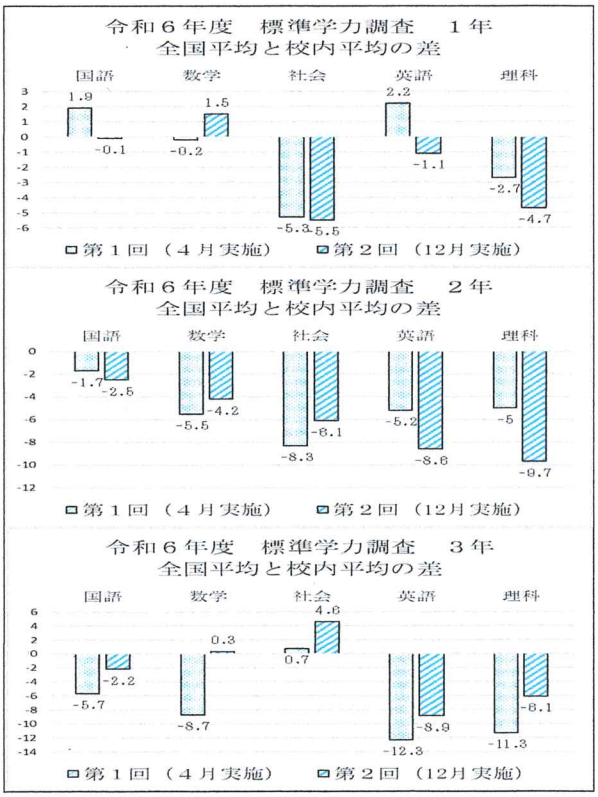

図１　令和６年度標準学力調査第１回・第２回の結果

「学び合い」の後に確認テストを必ず実施したり、単元テスト等の対策を「学び合い」を通して行ったりしてきたことで習熟が図られ、全国平均を上回ることができたと考えられる。一方で、校内平均と全国平均との差が開いた７教科については、「学び合い」に意欲的に取り組んだとしても、十分な習熟を図ることができなかった。

以上のことを踏まえ、令和７年度は更に質の高い「学び合い」を目指すことにした。「学び合い」の工夫を通して、生徒が主体性を高め、自立した学習を進めて、「分かる」「できる」ことを目指した。

３　研究主題・副題の捉え

（１）確かな学力とは

知識や技能に加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等までを含めたものとする。そして、学力の基礎・基本は、知識・技能、思考力、判断力、表現力、学ぶ意欲、学び方、課題発見能力、問題解決能力の８つの力で構成されるものとする。

（２）「学び合い」とは

教師が教え込むのではなく、提示された課題に対して、生徒が話し合い教え合うことと捉える。具体的には、「生徒自身が課題に気付く」、「生徒同士が話し合いながら、課題を解決する」、「生徒全員が『分かる』『できる』ようになることを目標とする」の３点を基本的な考え方とする。生徒同士の学び合いは、学力の向上を図るとともに、学級の人間関係づくりにも大きく貢献するものと考える。「全員が分かる」ことを目標に、成績上位層が成績下位層に教える活動を積極的に取り入れる。これによって、成績上位層は級友に教えることで学力の定着を図ることができ、成績下位層は、教師の説明では理解できない学習内容を級友が分かりやすく教えてくれることによって、確かな理解につながるものと考える。

（３）質の高い「学び合い」とは

質の高い「学び合い」とは、生徒が主体性を高めて、自立した学習を進められるような「学び合い」を指す。また、「学び合い」を通して、生徒が「分かる」「できる」ようになり、標準学力調査や全国学力・学習状況調査の得点率向上につなげることを指す。

４　研究目標と研究の視点

（１）研究目標

確かな学力を身に付けた生徒を育成するために、生徒が主体的に学び、「分かった」「できた」を実感できる「学び合い」の在り方を明らかにする。

（２）研究の視点

以下の視点１と視点２の手立てを講じることによって、生徒が様々な問題に主体的に取り組むことができるようにすることで、「分かる」「できる」ようにして、確かな学力を身に付けた生徒の育成を目指す。

①視点１　生徒の主体性を高める「学び合い」の工夫

生徒が「やってみたい」「取り組んでみたい」と思えるような動機付けの工夫、生徒が自ら課題を見付けて取り組むことができるようにする工夫を行う、生徒が分からないことを積極的に級友に聞くことができる場の工夫等を授業に取り入れることによって、生徒の主体性を高めることができるかどうかを探究する。

②視点２　生徒が「分かる」「できる」ようになる「学び合い」の工夫

生徒が互いに理解度を確認し合う場の工夫、生徒が学習したことを発信する場の工夫、生徒の習熟度に応じて問題を選択できる工夫等を取り入れることによって、生徒が「分かる」「できる」ようになるかどうかを探究する。

５　研究内容

（１）「学び合い」のルールの掲示と意識付け

各教科における「学び合いを取り入れた授業の進め方」や「学び合いを通して目指すもの」について共通理解を図り、生徒に意識付けを行うために、「『学び合い』のルール」を全教室に掲示した（図２）。

図２　「学び合い」のルール（教室掲示物）

（2）校内研究授業の実施

研究主題や目指す生徒像に迫るために、各教科において、研究の視点１と視点２の手立てを講じた研究授業を１年間で７回実施した。また、指導主事学校訪問はＢ訪問を選択し、全職員が研究授業を実施した。このように多くの研究授業を通して、成果や課題を共有し、日常の授業改善に役立てることができた。

６　研究の成果と課題

（1）校内研究授業における手立ての成果と課題の要点（成果○、課題●）

①視点１　生徒の主体性を高める「学び合い」の工夫

○多種多様な材料、題材を準備したことによって、生徒の興味・関心が大いに高まった。

○ワードクラウドなどのアプリケーションで生徒の意見が可視化されて、本時の学ぶ目的を焦点化しやすくなった。

○友達の作品の「良いところ探し」「録音して聴き合うこと」「インタビュー」などは、生徒にとって自立的な活動となり主体性が高まった。

●学ぶ目的について生徒自身に考えさせることによって、目的意識が高まり主体性が増す。

●生徒が自ら学習課題に気付き、発見できるような働き掛けをすれば、主体性が増す。

●「学び合い」を授業の前半に取り入れてもよい。考えや答えの見通しを持たせることにつながる。

●生徒１人による思考や活動に時間を掛け過ぎることなく、生徒同士での意見の交流や議論の焦点化に十分な時間を取ることで、主体的な活動を促す。

②視点２　生徒が「分かる」「できる」ようになる「学び合い」の工夫

○ワードクラウドなどのＩＣＴ活用によって、様々な考えを可視化したことで、他者の考えを十分に共有することができた。

○自分の考えや作品をじっくりと確認したり見たりする時間を作ることによって、よさや課題などについて客観的に考えることができるようになった。

○「色々な視点から調べて」「教科書だけでなく、～～という資料から情報を仕入れて」等の教師の声掛けによって、生徒が物事を多面的に捉えられるようになった。

●目的、内容、評価について、授業の冒頭やシラバスなどで生徒に伝えることによって、授業のゴールが明確になり、ねらいに迫る学習活動が展開できる。

●毎時間、確認テストのように生徒個人がじっくりと考える時間があると、「分かる」「できる」ことが増える。

●「学び合い」では、グループ編成を生徒に委ね過ぎず、時には教師が意図的にグループ編成をすることによって様々な生徒との関わりができ、気付きや発見、理解を促進できる機会が増える。

●グループ内の目標を十分に共有することによって、目標達成の意識が高まり、「学び合い」が活性化する。また、ホワイトボードを活用することによって目標の共有を図ることができる。

（2）指導主事学校訪問の研究授業における手立ての成果と課題の要点（成果○、課題●）

①視点１　生徒の主体性を高める「学び合い」の工夫

○小集団でじっくりと話し合い、相手の考えの視点や考える上での疑問、悩み等を共有した上で「学び合い」を進めることができた。

○身近なものを教材として活用することによって、生徒の興味や関心を引き出すことができた。

○生徒に見通しを持たせること、解き方についても文章で書かせることによって、学習活動を十分理解した上で本時の学びに入ることができた。

○導入時に既習事項の復習に取り組ませたことによって、生徒が自信を持って学習に取り組むことができた。

●生徒が学習課題を学ぶ必要感を持っているかどうかが大事であり、ただ「学び合い」をさせることだけに終始しては意味がない。そのためにも、「学び合い」の目的を明確にする。

●レディネステストの誤答分析を行うことによって、授業の問題点が明確になる。そこから生徒に学ぶ目的を見いださせるのもよい。

②視点２　生徒が「分かる」「できる」ようになる「学び合い」の工夫

○「学び合い」の中で、お互いに称賛し、認め合うことで意欲が高まった。日々の学級経営がしっかりしているからこそ、「教えて」と言えるような雰囲気をつくることができた。

○終末に類似問題に取り組ませることで、生徒一人一人の習熟度を十分見取ることができた。

●「学び合い」の土台はできているが抵抗がある生徒への配慮が必要である。進度に差が生じた時の

対応や早く終わった生徒への課題提示があると更によい。

●相互観察の時間を設けるのも有効である。あえて途中で「学び合い」を止めてもよい。他のグループの動向や出された意見等を共有し、「学び合い」の質を更に深めることもできる。

●活動の内容が不明確で、話合いの内容が多岐にわたるような活動になると、本時の目標からそれることがある。生徒からの発言をコントロールすることも時には必要である。

図3　各研究授業における「学び合い」の様子

（3）年2回の標準学力調査の結果から

令和7年4月と12月に実施した標準学力調査では、15教科のうち10教科で校内平均と全国平均との差が縮まり、中でも社会は全学年で3ポイント以上縮まった。また、第1学年の国語、数学、社会、英語、第2学年の英語は全国平均を上回った（図4）。

第1学年数学では、毎時間ミニテストと解説を行い、解く手順が正確かどうかを生徒に確かめながら解説を聞くように指導した。生徒が「どこでどのように間違えたのか」をじっくりと確認して解き直しを行った。また、第1学年社会では、社会的事象を自分事として捉えさせるための発問の工夫をし、課題解決に向けた個人による考察を行うことで、生徒が意欲的に取り組むようになった。その後の「学び合い」では、自信を持って意見交流し、「分かった」「できた」と感じる生徒が増えた。さらに、第1学年英語では、授業の冒頭やシラバスで評価規準を示したことで、「何ができるようになればよいか」が明確になり、達成目標を意識した学習ができた。以上のことが、数学、社会、英語で全国平均を上回った要因と考えられる。

一方、校内平均と全国平均との差が開いた5教科については、得点率下位層の生徒が、学習課題を自分事として捉えることができず、自分の考えを持たないままに「学び合い」に参加したことによって、十分な習熟を図られなかったのではないかと考えられる。

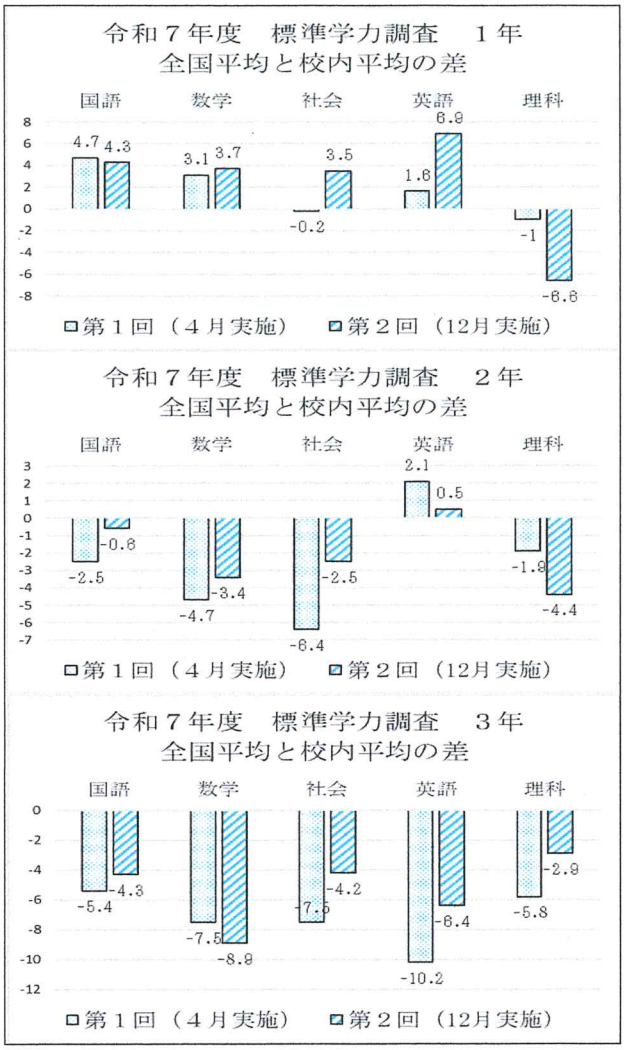

図4　令和7年度標準学力調査第1回・第2回の結果

7　終わりに

本研究から、「生徒が自ら学習課題を見いだすことができるような教師の働き掛けがあれば、生徒の主体性が高まる」ということが分かった。一方で、「『学び合い』を行うまでに十分な考えを持つことができない生徒がいる」「『学び合い』で他者に頼りすぎる生徒がいる」という反省も挙げられた。また、学力調査結果から、「学習課題が明確になっておらず、自分の考えを持てていないと十分な習熟が得られない」という課題も挙げられた。

以上のことから、生徒が学ぶことに興味・関心を持ち、学習を自分事として捉えて、毎時間見通しを持って粘り強く取り組むと共に、自らの学習をまとめて振り返り、次の学習につなげようとする主体的な学習者の育成が必要であると考えた。令和8年度は、生徒の主体性を高める研究に特化して、研究を進めたい。

執筆責任者　教諭　中谷　友祐